

令和 5 年 6 月 29 日現在

機関番号：32415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04641

研究課題名(和文) 0～3歳児の「学びの芽生え」を育む保育モデルの検討：海外の保育実践分析からの示唆

研究課題名(英文) Creating a model for education of 0-3 year-olds to nurture basis for future learning by analyzing overseas cases of educational practices

研究代表者

上垣内 伸子 (KAMIGAICHI, Nobuko)

十文字学園女子大学・教育人文学部・教授

研究者番号：90185984

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：0～6歳の一貫した教育を行うイタリア、ピストイア市の0～3歳児の教育に着目し、乳児期からの学びを支える実践と基盤となる保育観がどのように共有され教育の質を高めているか、それに触れた日本の保育者の保育再考にどのように資するかを明らかにする目的で、ピストイア市公立保育園での観察とその結果を提示しての国内の保育士125名対象の聞き取り調査を行った。0歳からの教育を模索する日本の保育者が共通する子ども中心の保育観をもつピストイアの日常生活の中にある教育、全人的発達を育む美的環境、子ども同士の関係と自発性の尊重という保育特徴に触れることが、保育観を再考し実践を工夫する意識醸成につながることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

0歳からの一貫した教育を志向し実践するピストイア市の保育に触れることによって、日本においてはこれまで養護に重きが置かれがちであった0～3歳児の保育における「教育」的視点を見出せたことは、保育者が子ども観と保育観を「子どもは能動的で主体的で相互的な存在」、「自発性を育む保育を志向する」ものへの転換を促すことにつながったと考える。そのことは、実際の保育者の実践にとって有用であるだけでなく、保育の質向上にも資する。さらに、保育者自身の保育に対する専門職としての意識の高まりと省察に対する能力を高める。

研究成果の概要(英文)：To promote qualified education for 0-2year-olds at daycare centers, it is crucial to reconsider ideas of ECEC shared implicitly and realized in practice by practitioners. Using information on child-centered ECEC of Pistoia (Italy) as a cue, we investigate how professionals reflect on their ideas and practices to be improved. At first, information was obtained by observation and interviews at Pistoia. Semi-structured group Interviews were conducted to 166 professionals of daycare centers (5-16 participants at each group). Information on ECEC of Pistoia was focused on; educational practices in daily life, holistic education in esthetic environment, and valuing interaction and initiatives among infants. Participants' opinions were obtained and analyzed. Results showed various reflections by participants; re-discovery of their own ideas, discovery of new ideas, and creating different practices. Information of another qualified ECEC led them to be more reflective to improve their work.

研究分野：幼児教育学・保育学

キーワード：0～3歳児の教育 イタリアと日本の比較調査 グループインタビュー調査 保育者の教育観 生活のなかの教育 美的環境を通しての教育 個の自発性と関係の尊重 自園の保育の再発見

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

0歳から就学までの一貫した保育・教育の重要性への認識が国際的に高まり、各国で保育の質の向上を目指す施策が投入されている。0~3歳児からの遊びを中心とした質の高い教育は生涯を通じての恩恵をもたらすという研究成果から、3歳未満児の保育の重要性に関心が寄せられている。

日本の3歳未満児保育は従来「教育」よりも「養護」に重きがおかれる傾向があったが、2018年の保育所保育指針の改訂では、「生涯の学びの出発点としての乳児期からの学びの芽生え」とその「学び」に対する生活や遊び場面での適切な援助が謳われており、「0~2歳児の保育における教育」が積極的に位置づけられた。

イタリアのピストイア市では、0~6歳の一貫性と連続性のある教育を保障するなかで、教育と養護が一体となった全人格的な乳児保育を行っている。その理念を明記した教育憲章は、子どもを「社会的能力と独自のアイデンティティの持ち主で、潜在性を関係のネットワークのなかで発達させ十分に実現することを促される存在」と定義し、子どもの発達の過程を「自己信頼感、他者への信頼がすすむなかで、子どもの興味、活動、他者との関係において促されるもので、能力や成果ということばで測られるものではない」と規定している。教育憲章はさらに、乳幼児の保育施設での教育について、「生活と文化の場としての市全体が教育のリソースである」、「乳幼児期の教育には独自性がある」、「教育は子ども主導でなされ特に美的感覚を豊かにすることを重視する」、「保育施設は個人の発達を他者と共有する場所となる」、「家庭の参加は園との相互理解とよい実践を保障する」と述べている。

EU委員会の幼児教育ワーキンググループは、2014年10月に、『乳幼児期の教育とケアの質保障の枠組みに関する基本原則の提案 (Proposal for key principles of a Quality Framework for Early Childhood Education and Care)』(EU委員会管轄下のECECワーキンググループ報告書)を出した。この提案は先行研究のレビューと保育場面の観察によって得た、質の高い保育についての共通理解に基づいてなされたが、その1つがピストイアの保育実践である。

我々は、2007年より定期的にピストイア市を訪問し、保育観察や保育者への聞き取り調査を継続して行ってきた(平成20~22年度十文字学園女子大学共同研究費助成、平成24~26年度科学研究費助成基盤研究C)。保育ドキュメンテーションの翻訳と分析、保育者が専門性を高めてきた成長プロセスのインタビュー、保育の質を高める上で専門化した児童館アレア・バンビーニの役割と考察、環境構成と素材の選択、保育材としての町を活かした保育内容について研究を行い、報告書、論文の他に、保育者/保育研究者を対象に研修や講演、シンポジウムによって、次のようなピストイアの保育の特性を伝えてきた。ドキュメンテーションの作成によって、子どもの学びを可視化し、共有化していること、美の源泉としての自然やアートを取り入れ、子どもの周りの環境を美しく温かみのあるものにしていくこと、特に乳児においては、球や円柱など基本要素とでもいえるべきシンプルな形や音、光などの素材が用意され、子ども自身が対象とじっくり関わって遊ぶことが保障されていること。そして、これらが成立する背景として、園内カンファレンスや園を越えた共同でのカンファレンスや研修を通して、ピストイアの保育観が形成されると共に保育者の資質能力も高められてきたことなどである。

このような0歳からの一貫した教育を志向し質の高い保育実践を行っているピストイア市の保育における教育の理念および実践を手がかりに、日本の0~2歳児保育に照らしてみることは、日本の乳児保育における教育を再考するのに意味があると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は次の2点であり、第1部と第2部に分けられる。第1部は、0~3歳児の質の高い教育のために市独自で幼保一体化を図り、6歳までの一貫した教育を行うイタリア、ピストイア市の0,1,2歳児の教育に着目し、乳児期からの学びを支える保育実践と基盤となる保育観が保育者間でどのように共有化され教育の質を高めているのかを明らかにすることである。そして第2部では、第1部で見出したピストイア市の保育の理念と実践事例の情報を日本の保育者に提示し、ピストイア市の保育を手がかりに、日本の保育者がどのように自身の保育実践の底流にある、保育観、保育者観、乳児保育における教育への考え、保育の現状について省察し、日本の乳児(0~2歳児)に対する教育を再考していくのかを明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1)ピストイア市における0~2歳児の保育特性と保育者の保育観を探る観察・聞き取り調査  
ピストイア市における調査研究の方法は、ピストイア市の公立保育園1ヶ所の保育の観察とビデオ撮影、担当保育者の聞き取りおよびカンファレンスへの同席の記録、観察年度の保育の記録である「週報」の収集である。調査時期は2018年2月。

観察方法と記録の整理

観察対象:0歳児クラス(乳児5人、保育者2人)、1歳児クラス(幼児15人、保育者2人)、2歳児年少クラス(幼児15人、保育者2人)、2歳児年長クラス(幼児17人、保育者2人)

観察時間：午前 9 時頃から昼食後の午睡まで。観察者：観察記録者 1 名、ビデオ撮影者 2 名。  
観察方法：撮影者は、保育者 2 名のうち 1 名に焦点を当てた保育者と子どもたちの関わりや  
周辺での子どもの行動の撮影と、保育者と含むクラス全体の様子の撮影を分担し、観察記録者は、  
全体の様子を継時的に記録する。

観察結果の整理：保育者に焦点を当てたビデオを研究者 3 名が一緒に見て、保育プログラムの  
設定、保育者の働きかけ、保育者と子どものやりとり、子ども間の相互作用、子ども  
単独の行動について注目できる対象事例を取り出す。イタリア語が堪能な翻訳者に依頼して日  
本語テロップ付き動画を制作し、観察記録と照合して分析のための記録を作成し分析する。

聞き取りおよびカンファレンスへの同席の方法と記録の整理

観察の翌日に、各クラスのビデオ撮影の対象となった保育者 1 名に対し聞き取りを行った。  
あらかじめ書面で提示した質問事項に加え、前日の観察から知りたい保育の意図、行動の意味等  
について質問した。時間は一人 60 分～90 分。通訳を介して行った。また週 1 回開催する保  
育者カンファレンスに同席した。発言は IC レコーダーに録音し、イタリア語の堪能な日本の  
翻訳者に依頼して逐語訳を作成した。

週報資料

各クラスでは毎週 1 回、記録を作成している。保育で行ったこと、保育者が子どもについて注  
目したことを保育者が書いたものである。2017 年 9 月の年度始まりから観察週の 2018 年 2 月  
までの週報を収集、翻訳し分析した。

## (2) 国内保育者対象としたピストイアの保育を提示してのグループインタビュー調査

国内における調査研究の方法は、ピストイア市の保育の考えと実践例を日本の 0～2 歳児の保  
育経験をもつ保育者に提示し、それに対する意見や実践例の語りを記録、分析する半構造的グル  
ープ・インタビュー調査である。調査時期は 2019 年 7、8、12 月、2021 年 12 月、2023 年 1 月。  
研究参加者：現職保育士・保育教諭のべ 174 名（公立保育園・子ども園 148 名。私立保育園 26  
名）。調査グループ数 15 グループ。

調査手続き：

情報の提示と説明：30 分間のパワーポイント（文章・写真・映像）で提示し、説明を行う。

提示した情報：ピストイア市の概要 ピストイア市の保育制度と理念 保育園（0-2 歳）  
の生活 保育の特徴 3 点の情報：「日常生活のなかの教育的な働きかけ」、「美的環境を通した  
子どもの全人的な発達を育む」、「子ども同士の関係と個の自発性の尊重から生まれる教育」。

保育者の意見とグループ討論：研究参加者は、まず感想と 3 点についての意見を記述し、思  
い起こす自園での実践の再発見や見直し、実践したいこと等を口頭で発表し、討論する。

所要時間：1 回当たり 1 時間 30 分～2 時間。

データ処理：発言の逐語記録および記入シートの内容を分類し、分析する。

## (3) 倫理的配慮

ピストイア市の保育観察と撮影に際しては、市の教育局を通して同意を得た。国内のグル  
ープインタビュー調査の参加者すべてに事前の説明を行い、同意書を得た。回答は匿名性を持たせる  
配慮をした。本研究は、十文字学園女子大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施している  
(2017-037)。

## 4. 研究成果

### (1) ピストイア市の保育園における 0～2 歳児の教育の特徴

ここでは、2018 年に行ったピストイア市の調査から得られた、0、1、2 歳児の教育の特徴、保  
育者間で共有されている保育観を示す。

ピストイア市の概要

イタリアの国の保育園法は 1971 年にできたが、地方自  
治体の裁量の大きく、0～3 歳の保育は自治体の管轄であ  
る、したがって自治体によって大きく異なる。市の裁量で  
0～6 歳の一貫した教育をすすめているピストイア市は先  
進的な保育で知られている。ピストイア市はトスカーナ  
地方の人口 9 万人の中規模の歴史の古い都市であり、三  
世代が近所に暮らす家族が多いのも特徴である。

ピストイア市の保育制度

市が国の保育園法に従って公立保育園を創設したと  
き、市は、それまでの民間託児所と同じではない、教育の場としての保育園にするという方針を  
打ち出し、以来現在まで引き継がれている。国の法律では 0～3 歳の保育園と 3～6 歳の幼児学校  
に分かれているので、ピストイア市でも保育園と幼児学校は別の施設であるが、教育の内容とし  
ては、0～6 歳の一貫性と連続性のある教育を保障している。概要を表 1 に示す。

市の教育理念「教育憲章」

市には「保育所保育指針」にあたるものはないが、0 歳から 6 歳までの教育についての「教育  
憲章」で以下のような理念を示している。

○子ども観：子どもはそれぞれ独自のアイデンティティの持ち主。潜在性を他者との関係の中で  
発達させ発揮する。

表 1. 保育園（0～2 歳）の概要

公立(6 か所)市の管轄+認可私立園 (6 か所)
・時間:月～金 7 時半～17 時半
・保育者一人の子ども数: 0 歳:4 人、1 歳:7-8 人、2 歳:8-10 人。
・保育者養成:大学で3年間

○発達観：発達自己信頼と他者への信頼、興味、活動、他者との関係で促される。能力や成果では測れない。

○乳幼児教育理念：

- ・市全体が教育のリソース。子どものためのサービスの場。・乳幼児教育にはその独自性がある。
- ・教育は子ども主導。美的感覚を豊かにする。・保育施設は個人内の発達を他者と共有する場。
- ・家庭の参加は相互理解と実践を保障。

○保育の基本原則：保育園は親の就労に関係なく、すべての子どもに開かれている。

○保育の目標「子どもを温かく迎え入れる」という基本の上に、探求心、好奇心を持ち、自分の行動を決められると同時に協調性をもった子どもを育てる」

○乳児保育で重視すること：

- ・子どもは、有能で周囲と能動的に関わり、仲間や大人と対話する存在。・保育は子どもの教育の場であり。社会、情緒、身体、感性、知性が一体となった子どものホリスティックな発達を支える。・子どもの自発性と子ども同士の関係の尊重。・美的で落ち着いた環境。・大人の役割：子どもの成長を傍らから支援する姿勢。そのための環境を作る。

保育園の生活

0歳児クラス：個々の子どものリズムに合わせた生活を基本とする。

1歳児クラス、2歳児クラス：登園 9：30 朝の会～（クラス一緒、おやつ） 小グループ遊び（室内、戸外） 昼食 昼寝 遊び 降園。

保育園（0-2歳）の教育の特徴

観察データと保育者へのインタビュー調査内容の分析から得られた0,1,2歳児の教育の特徴として、以下の3点があげられると考えた。

特徴1：日常生活のなかの教育的な働きかけ

- 教育的な場面と意図的に設定するのではなく、日常の生活のなかに教育の要素がある。例えば、
- ・子どもの側から教育の材料を見つける。子どものちょっとした興味、注目、不思議と思ったこと、驚いたことを観察して、それを発展させる形で教育をする。
  - ・習慣として毎日繰り返されていることを教育につなげる。
  - ・おむつ、手洗い、着替え、食事などの養護活動に教育的な働きかけを入れる。

特徴2：美的環境を通して子どもの全人的な発達を育む

- 心身ともに心地よい幸せな（ベネッセレの）環境とは以下を満たす「美しい環境」である。
- ・視覚的聴覚的なストレスのない落ち着いた環境
  - ・子供の目線で考えられた居心地よく安定できる生活空間
  - ・子どもの好奇心や探索心を刺激し、知識を得たり創造したり想像したくなる環境
  - ・大事にされ受け入れられていると感じる空間 ・他者とつながりたくなる空間環境
- 即ち「美しい環境」は、見た目の美しさだけでなく、心理的安定、生理的快適さ、自分の肯定感、人への優しさ、温かみ、物を大切にすること、思考や創造性等すべてを包括するものである。

特徴3：個の自発性と子ども同士の関係の尊重から生まれる教育

個と個の協働が集団であり、個々の経験を共有し繋がるのが集団活動の要点であり、保育者は次のような考えをもち実践している。

- ・保育園は、基本的に友達と遊ぶことが一人で遊ぶよりも楽しいところである。
- ・子どもは仲間に興味をもち協力したいのだというのが保育者の考える保育の前提であり、この保育者の目が子どもに、取り合いよりも協力や助け合いに向かわせる。
- ・保育者は子どもが仲間に自分の楽しみを伝えたいように支えるが自発的な彼らの関係は尊重する。

一人の子どもの興味が他の子に伝わって一緒に遊ぶのを促すために、全体の雰囲気がおだやかなこと、一人の遊びの繰り返しや長期に継続される遊びを保障することが配慮されている。他児が模倣したり参加したりする可能性が増え、結果的に個からグループへと集団が発展し、仲間とつながることの喜びが生まれる。

上記の3つの特徴「日常生活のなかの教育」「美的な環境」「子どもの自発性と関係の尊重」は、保育のなかで統合されている（図1）。

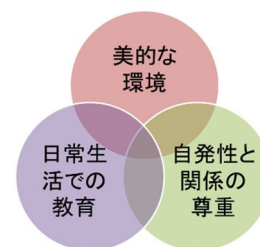


図1.ピストイアの保育特徴

（2）ピストイア市の0～2歳児の保育からの日本の保育者による保育の再考

0から2歳児保育の経験のある保育者を対象として行った12グループのグループ・インタビュー調査から、ピストイア市の保育の特徴3点に対しての自園の実践を振り返ること及び自己の保育を省察することで得られた視点からの意見の分析と、ピストイアの保育からの振り返りとして自園もしくは自身の保育に対して再発見したことについての分析を行った。

特徴1：子どもの日常の中の驚きと探索を支える

日本の0～2歳児の保育者にとって、ピストイア市の保育の「日常の生活場面の中にも教育がある」という考えは受け入れられ、自身の保育との共通点も認められた。しかし、一部の保育者では「教育」という概念の捉え方が異なることもわかった。具体的には、生活のなかの教育とは、しつけや身辺自立を促すことや、何かができるようになるのを教えることと捉えていたが、そうではなくもっと広く捉えられる、と視野が開かれたという発言があった。「生活の中にある教育」というと、「食育や植物栽培のような生活体験を豊かにすること」「生活のなかで身近な物を題材

に表現活動をする」というように生活体験そのものを豊かにすることがすなわち教育であるという発想があり、生活の中に教育が一体となってあるということには同意するものの、実践することには難しさがあることがわかった。

自身への省察として、保育者が教育という意識をもつか否かで子どもの日常の中の発見や驚きは見逃されてしまうことも語られた。そのことは、すなわち保育者が教育の意識をもって子どもの日常を見直すことで、自己の保育者としての新たな視点の獲得につながると考えられる。

#### 特徴2：美的環境を通して発達を育む

「美しい環境」を大切にすることは、全体的な計画の中にも位置づけられ大切にしていることであったが、その意義と重要性和「美」のもつ教育力を、ピストイアの保育から照り返されることによって再認識することとなった。「美」という視点から環境をとらえ直したことで、大人が子どもと保育をどのようにとらえているか、子ども観、保育観があぶり出された。自分の子ども観・保育観ばかりでなく、背景にある日本の伝統的な子ども観や、日本の保育が根本から考えることなく踏襲してきた保育観（ex. 子どもにはかわいらしい色合いのものがよい、子どもだからこれで（が）よい）まで振り返り問い直そうとする意識が生まれた。

環境構成の観点として、美しい自然は不思議と驚きに満ち、子ども自身がさらに関わり発見していこうとする意欲を育む、素材が内包する美しさを活かす配置の工夫が主体的な遊びを引き出す、美は心地よさを生み出し、落ちついた空間は遊びを生み出すことが見いだされ、美的環境は自発的な遊びを支え、能動的な学び手である子どもの発達を育むことが認識された。

さらに、「美的環境」は、人的環境としての保育者自身の美への気づき、美に対する感性を磨くことによって作られることを確認する契機ともなり、美に価値をおく保育に触れることは美的環境のもつ重要性に対する深い省察に繋がると考えた。

#### 特徴3：子どもの自発性と関係を尊重する

子どもの自発性と子ども同士の関係の尊重ということについては、参加者ほぼ全員が同意したが、実際には容易ではないという意見も多く聞かれた。また、保育者の介入が子ども間の関係の基礎と考える傾向がみられ、大人が関係のきっかけや橋渡しをするという事例は、介入のない例よりも多く出された。子どもと大人との関係の中の学びから子ども同士に広がる例、大人の模倣を他児に向けてという例も出された。保育者は、子どもたち自身のもつ力よりは大人・子ども関係に焦点を向けていると考えられる。そこから、実践の課題について種々の意見が出された。

「子ども同士で学んでいることもたくさんあるが、それを大人が見抜けていない」「職員間でこの認識を意識化しあって共通の認識をもつことが課題である」という意見がある一方、「ことば以前にも共感や模倣によって子どもたちは知識を共有する力をもっていることを保育者たちは共通に認識している」という園もあった。保育者は見守ることが重要と理解していても、「日本の保育者の養護的な特徴として、何かしていなくっちゃいられない、手が出てしまう傾向がある」ことを自覚した上で、どう見守ればよいのかは、「いっしょに楽しむ目」「共感的な目で見るのが大切」という意見があった。さらには、子どもの自発性や自然な関係を見守ることを困難にしている要因として、安全面と衛生面の配慮の優先、時間的制約、狭い・物が多い・音が響くなど落ち着いた社会的雰囲気を作るのが難しい空間的制約があげられたが、同時に自分たちで改善できることがあるという意見も多かった。保育課題の重要点として次の7点が見いだされた。

子どもは環境に能動的に働きかけ自らを発達させる「有能性」の認識と子どもへの信頼感。

子どもの自発的な興味や驚きから関係が作られることへの理解と共感。

養護的意識、「保育者の仲介」「大人・子ども関係から子ども同士の関係へ」の枠組の見直し。

子ども間の肯定的な関係を促す穏やかな社会的雰囲気を作る環境作り。

「教育」を広い意味で捉え、どんな場面や行動にも教育の手がかりを見出そうとする視点。

子どもを観察する目を学び、実践を理論化・意識化するための研修。

実践に関する保育者間での認識の一致のための協議・協力体制。

#### 自園の保育に対する再発見

上記の3特徴も含め、保育者がピストイアの保育を知ることで自園の保育をどのように捉えなおしているかあるいは捉えなおそうとしているかについての分析からは5点があげられた。

ピストイア市の保育は、文化的背景の異なりを越えて日本の保育との共通点や共感することがあり、自園の保育を省察する上で参考になる。

「教育」の概念を「子ども自身から始まるもの」という視点でとらえ直す。保育者が子どもに教えることが「教育」ではなく、子ども自身が主体的な学び手であることへの気づきが得られた。

自身の保育実践の力量を向上させることへの動機づけとなる。

自らの「制約」に気づき、その中で可能な保育実践や制約を減らす実践ができるか模索する。

ピストイアの物理的な環境から示唆を得て、自園の保育環境への工夫を考える。

保育者が質の高い保育実践を学び、自身の保育実践を丁寧に振り返ることで得られる気づきは保育者としての資質を向上させることにつながる。しかし、個人での取り組みには限界がある。例えば様々な制約があるとしても、明確な保育理念のもと、協働と対話によって共通の保育観をもちながら保育実践する基盤をつくることは保育の質を向上させることにつながると考えられた。

#### <参考文献>

星三和子・上垣内伸子・向井美穂・イタリア、ピストイア市の協働による統合的な乳幼児教育調査報告書 . 科学研究費助成基盤研究C 課題番号 24531029 . 2015 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 上垣内伸子、向井美穂、星三和子
2. 発表標題 イタリア、ピストイア市の0～2歳児の教育から日本の保育を再考する（3）美的環境を通して発達を育む
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会（富山、富山大学、オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 向井美穂、上垣内伸子、星三和子
2. 発表標題 イタリア、ピストイア市の0～2歳児の教育から日本の保育を再考する（4）自園の保育に関する再発見
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会（富山、富山大学、オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nobuko Kamigaichi, Miho Mukai, Miwako Hoshi-Watanabe
2. 発表標題 Reconsideration of Education for 0-2 Year-olds in Japanese ECEC; Suggestions by Pistoia City in Italy
3. 学会等名 30th EECERA ANNUAL CONFERENCE (EECERA Online Festival 2021,online) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 向井美穂・星三和子・上垣内伸子
2. 発表標題 イタリア・ピストイア市の0～2歳児の教育から日本の保育を再考する（1）子どもの日常の中の驚きと探索を支える
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会（奈良、奈良教育大学、コロナにより大会論文集掲載による発表と意見交換）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 星三和子・上垣内伸子・向井美穂
2. 発表標題 イタリア・ピストイア市の0～2歳児の教育から日本の保育を再考する(2) 子どもの自発性と関係を尊重する
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会(奈良、奈良教育大学、コロナにより大会論文集掲載による発表と意見交換)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 星三和子・向井美穂・上垣内伸子
2. 発表標題 イタリア、ピストイア市の保育実践から0～2歳児の教育を考える(3)日常活動のなかの教育
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会(東京、大妻女子大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上垣内伸子・向井美穂・星三和子
2. 発表標題 イタリア、ピストイア市の保育実践から0～2歳児の教育を考える(4) 教育における美の価値
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会(東京、大妻女子大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miho MUKAI, Miwako HOSHI, Nobuko KAMIGAICHI
2. 発表標題 Rethinking of Education for 0-2 Year-olds in Japanese ECEC; Suggestions by Education of City of Pistoia, Italy
3. 学会等名 OMEP-APR in KYOTO 2019 (OMEP アジア・太平洋地域大会 2019 in 京都、京都テルサ)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上垣内伸子・向井美穂・星三和子
2. 発表標題 イタリア、ピストイア市の保育実践から0～2歳児の教育を考える(1) 教育をどうとらえるか
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会(仙台、宮城学院女子大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 星三和子・向井美穂・上垣内伸子
2. 発表標題 イタリア、ピストイア市の保育実践から0～2歳児の教育を考える - (2) 子ども同士の関わりから -
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会(仙台、宮城学院女子大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 星三和子・上垣内伸子・向井美穂
2. 発表標題 保育現場における0～2歳児の教育と発達(1) イタリア、ピストイア市の0歳児保育の実践から -
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会(東京、早稲田大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上垣内伸子、向井美穂、星三和子
2. 発表標題 イタリア、ピストイア市の保育実践から0～2歳児の教育を考える(5) 共鳴箱としての保育者
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会(千葉、聖徳大学、オンライン開催)
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 向井美穂・星三和子・上垣内伸子
2. 発表標題 イタリア・ピストイア市の0～2歳児の教育から日本の保育を再考する（5）保育者自身の保育観の問い直し
3. 学会等名 日本保育学会第76回大会（熊本、熊本学園大学、オンライン開催）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	向井 美穂  (MUKAI Miho)  (40554639)	十文字学園女子大学・教育人文学部・教授    (32415)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	星 三和子  (HOSHI Miwako)	十文字学園女子大学・名誉教授    (32415)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------